

# 大正時代の串木野鉦山周辺鳥瞰図と坑内写真

<森 下 祐 一>



1. 大正時代の串木野鉦床周辺鳥瞰図(串木野市教育委員会社会教育課提供)。この絵図は昭和55年旭コミュニティの落成にあたり、故大津純雄氏が旭校区の発展を祈念して大正時代の故郷を思い出して描いた原図に、小牟田照男氏が平成9年に絵付けしたものである。

口絵1の鳥瞰図は、串木野市で特集号編集委員会を開催した折に、井澤九州大学名誉教授と訪れた串木野市市民文化センター歴史民族資料展示ホールで発見した、この図に示された地区では大正3年に鉄道が開通したが、右端に木場茶屋駅が見え、左端の五反田川を越えた先に串木野駅がある。北東-南西に伸びた鉄道・道路沿いの絵図に、鉦山施設が描かれているが、左ページ中央に通洞口、右端(表題のすぐ下)に西山坑口の文字が見える。そのすぐ右側に三井串木野鉦業所西山坑堅坑の櫓(中村, 2004, 本誌9月号写真1参照)が描かれている。歴史民族資料展示ホールではこの鳥瞰図のほか、串木野鉦山から寄贈された写真や坑内で使用した用具などが展示されていて昔の情景が蘇る(口絵2)が、本特集号も長く残るものであって欲しいと願う。

北薩地域広域調査では膨大な数のボーリング調査が実施され(中山, 2004, 本誌7月号第1表参照)、採取したコア試料(口絵3)は、調査期間中は鉦山に保管されていた。その一部は産業技術総合研究所の地質調査総合センターコアライブラリーに運ばれ、収蔵されている。



2. 串木野市歴史民族資料展示ホールでの鉦山関連写真展示の様子。



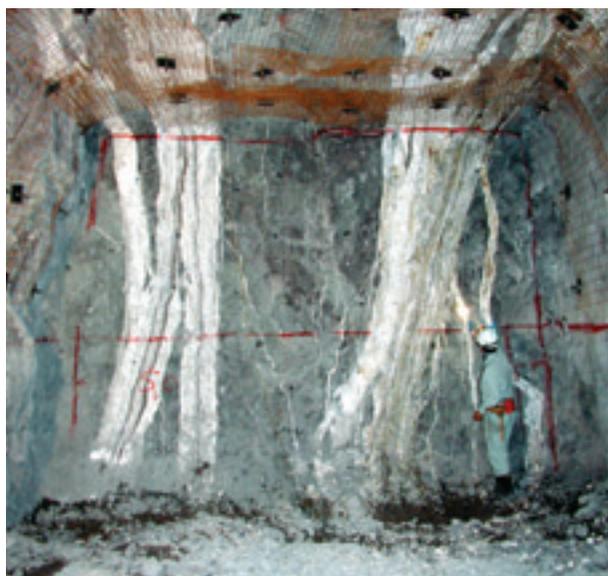
3. 串木野鉦山に保管されていたボーリングコア試料。



鳥瞰図に描かれている大正時代の坑内の様子は、口絵4から窺うことができる。主脈である串木野1号鍾の脈幅は広く、それを主な採掘対象とした西山坑の切羽にはこのような大空間の部分もあった。口絵5は現在の坑内(菱刈鉱山)の様子だが、新旧(菱刈、串木野)鉱山の切羽の対比が示される。菱刈鉱山はトラックレス(無軌道)方式であり、大きな坑道断面を持つので重機を入れることが可能で、採掘が機械化されている(岡田, 2004, 本誌9月号第5図参照)。



4. 大正時代初期の串木野鉱山西山坑内写真(三井金属鉱業株式会社提供)。



5. 菱刈鉱山の石英脈。山田鉱床成泉7脈, 50mレベル(海拔), W87B, 西押し。脈幅は3.83m(中山を含む)で、平均品位はAu 14.4g/t, Ag 9.4g/t。石英と少量の水長石からなり、黄鉄鉱などの硫化鉱物に富む灰色部がくり返されて縞状構造を示す。母岩は菱刈下部安山岩類で、緑泥石/スメクタイト混合層鉱物の特徴とする熱水変質を受けている。この坑道の横幅は約5m, 縦は4.5m以上あり、20t積鉱石運搬車が切羽まで入ることができる。右下の人物は菱刈鉱山探査課の甲斐道照氏。数奇な事に、彼は現在JOGMEC(石油天然ガス・金属鉱物資源機構)に出向中で、筆者と机を並べている。菱刈鉱床は人々を繋ぎ止める不思議な力も持っているらしい。(山本耕次 JOGMEC)